

千葉歴史の散歩道

房総のたからもの 一人々を魅了した青銅鏡一

千葉県教育庁教育振興部文化財課指定文化財班文化財主事 **わたなべ なつみ**
渡辺 夏海



家を出る前、鏡で身だしなみをチェックする人は多いだろう。今でこそ私たちにとって身近な鏡だが、銅と鉛の合金でできた「青銅鏡」（以下、銅鏡）は、約1,400～1,700年ほど前の古墳時代の人々にとっては、貴重な「たからもの」であった。

房総における銅鏡の出土数は、東日本のなかでは最多をほこる。これは前方後円墳という新しい墓の築造が、関東地方のなかでも早くから始まることと無関係ではないだろう。当時の房総の人々は、他の地域と盛んに交流し、新しい技術やたからものを手に入れていたのである。

今回は、筆者の研究フィールドでもある市原市草刈遺跡の住居跡や古墳の周溝から出土した13点の銅鏡に注目したい。これらは全て大きさが10cm足らずの小型鏡だが、中国で作られた銅鏡、また、弥生～古墳時代に日本列島で作られたものというように、異なる製作地と時期のもので構成される。さらに、古墳から出土する銅鏡には赤色顔料が付くことが多く、住居跡から出土するものにそれが付く例は珍しいが、草刈遺跡の銅鏡には赤色顔料の付着がみられる。銅鏡の表面状態からその多くは日常的ではなく、祭祀をはじめとした何か特別な機会に使用したものだろう。銅鏡をどのように取り扱っていたのか、また、そもそもどうやって手に入れたのかを明らかにするのは難しいが、全国的に出土例が少ない小銅鐸が当遺跡において同時期に存在することと併せて、弥生～古墳時代における房総の

青銅器には他地域とは異なる性格を見いだせるかもしれない。

古墳時代は銅鏡が好まれた時代で、日本列島全体で数千点も出土している。しかし、列島で作られた銅鏡は全体的に反っていることからそこに映る姿は歪んでしまい、身だしなみを確認することはできない。製作に必要な原材料、また製作技術も貴重であり、正しくそれは「たからもの」であったことだろう。

現在、博物館で見学できる銅鏡のほとんどは錆びて緑青色になっているが、作られた当時は金色や銀色に輝いていた。はるか昔の房総の人々は銅鏡に何を見いだしたのか、博物館に行った際はじっくり観察して当時に思いを馳せてほしい。



草刈遺跡出土銅鏡（筆者撮影）



製作当初の銅鏡（複製品・筆者製作）

千葉教育 梅 (No. 689) 令和6年11月28日発行

編集・発行

千葉県総合教育センター（代表）酒井 誠一

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13

TEL 043-276-1204

URL <https://www.ice.or.jp/nc/>

印刷所

千葉市療育センター いずみの家

〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3

TEL 043-216-2465